

英語教育を市全体で推進し、 自分の考えを自分の言葉で 発信する力を育みたい

1

兵庫県 朝来市教育委員会 学校教育課 指導主事 **中野和重**

朝 来市では、2014年度から文部科学省「英語教育強化地域拠点事業」の指定を受け、市立の小学校3校と中学校2校、県立高校1校が連携し、研究を進めています。特色の1つは、当初から小・中・高が協働で取り組んでいることです。高校での目標を「英語でディベートができる」と設定し、その到達に向けた4技能のCAN-DOリストと、各学校段階の年間指導計画を作成しました。小学校4学年分のカリキュラムも、中学校教員は小中接続の視点、高校教員は専門性の視点から意見を出し合い、完成させました。また、小・中・高の子どもが参加するイベントを開くなど、英語を使う場も積極的に設けています。

本 事業の担当指導主事として最も大切にしているのは、研究に携わる教員が働きやすい環境を整えることです。本市では小規模校が中心で、各校の教員数も多くありません。そこで、校長時代には、教職員全員が全学年にかかわるとい学校づくりをしてきました。教員が1人で課題を抱え込むことなく、意欲的に授業ができれば、子どもにとっても楽しい授業となります。その経験から、本事業も学校全体、市全体の取り組みにしようと、研究授業だけでなく、普段の授業も学内外に公開しています。

また、事業成功の鍵を握るのは中学校だと考え、事業全体の研究主任を中学校教員にお願いしました。小学校での外国語活動で高まった英語学習の意欲を、中学校が引き継ぎ、体系的な指導で学力として高め、高校に渡していくという重要な役割を担うからです。小学校と高校をつなぐ中学校の教員が、小学校や高校の授業公開にも多く参加するようになり、研究の質も高まってきました。

中 学2年生が2016年度に受験したGTEC for Students*のスコアは全国平均を超え、「英語が楽しい」という項目の肯定率も高く、研究の成果を感じています。2017年度はこれまでの活動をさらに改善し、事業指定終了後を見据えて、市内全校に実践を広げることが目標です。

子どもたちには、自分の考えを持ち、自分の言葉で発信できる力を身につけてほしいと思います。本市は地方の小さな地域ですが、ここから英語学習を通じて世界とつながり、様々な体験を積み重ねることで、失敗を恐れずに自ら挑戦する人間に育っていく。そうした真のグローバル人材となり、大きく羽ばたいていくことを願っています。



なかの・かずしげ◎兵庫県の公立中学校教諭(担当教科は数学)、朝来市立生野中学校校長などを経て、朝来市教育委員会へ。「英語教育強化地域拠点事業」の担当を2014年度の指定当初から務める。



研究成果を発表する授業公開は県内の全小・中・高に、また通常の授業公開は適宜、市内や但馬地域に、案内を送付。多くの人に来校してもらい、次の改善に向けた意見を集める場としている。

中学1年生では、クラスごとに学校生活について英語の「Newspaper」にまとめて発表するという活動を行っている。



VIEW'S EYE

ご自身の校長経験から、現場の先生と管理職との橋渡しをする役目を大切に、また英語がご自身の専門分野ではないからこそ、研究の環境づくりに専念したという中野先生の言葉が印象的でした。研究指定最終年度の2017年度は、11月に研究発表会を開催予定とのことです。(編集部)

* ベネッセが提供する中学・高校生対象のスコア型英語テスト。「聞く」「読む」「書く」の3技能を測る。さらに、「Speaking(話す)」をオプション受験することで、4技能を測ることも可能。